

Title	新制大学における体育の価値
Sub Title	Value of physical education in university
Author	辰沼, 広吉(Tatsunuma, Hirokichi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1966
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.7, No.1 (1967. 12) ,p.1- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00070001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00070001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 新制大学における体育の価値

辰 沼 広 吉\*

体育研究所紀要第3巻第1号に保健体育の対象と方法について論じた。その続編として、対象である身体活動の大学における価値を検討する。

## I. 緒 言

昭和24年、保健体育が新制大学に正課としてあたらしく発足した当時、大学基準協会での新制大学における一般体育科目設置資料の実技指導基本方針は、「大学における体育はどこまでも学生の自主自発活動にまたなければならない。自発活動に立脚しない体育指導は大学の最も排斥するところであり、わけても青年後期にあたる学生の体育が自発的にみずから求めて行うことにならないならば、正課として体育を大学の課程に採り入れた意味をなさない」とあった。

しかし基本的に学生の自発活動が大学教育において妥当なものであることはよく理解されるが、現実にすべての学生が体育に対して自発的であるとは考えられない。少なくとも過去20年間の体育実技について反省するとき、必ずしも学生の自発性だけにたよっているわけにはゆかなかった。

また一般教育としての教育基本法には「個性豊かな文化の創造をめざす教育」を指示しており、学校教育法では「大学は学術を中心として広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し知的道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とある。

これらの法の目標は基本的、抽象的表現であり、これが実施については、とくに大学ではその具体化に自由性があってしかるべきである。

慶應義塾大学では保健体育における体育実技は、これを実現するために具体的に基本実技と選択実技の2つの方法を採用しているが、これの可否について検討を試みる。

---

\* 慶應義塾大学体育研究所教授

## II. 体育実技の現状<sup>(1)</sup>

### A. 基本体育

体育の現実の行くべき方向の一つとして保健体育の対象である身体活動の自発性の主因となる基本的欲求を満足させることであり、このために、跳、走、投を中心に組み立てられたものである。そしてこの現代における基本的欲求の重要性の認識に文化的欲求をも合わせ多くの興味をもつ基本的動機づけとして集団としての球技(バレーボールまたはバスケットボール)、個人としての格技(柔道または剣道)を加え、更に水泳を夏季に行なっている。

これらは学生の身体活動を実際に助長し、科学的裏付けをもち新しく研究された技術を与えて将来のあらゆる生活の身体的基礎に資すると同時に生活の一部としてのスポーツの動機となるように組み込まれ教育されている。

### B. 選択体育

学生の自発性にもとづく運動要求を高次の立場から創造性へと導く動機を与えるために、スポーツを教材として用意し、これを選択的に実施させている。

そのために慶應義塾体育会出身の優秀な先輩を講師として迎え、長年培われた創造性に学生が直接に接する方法をとっている。従ってこの体育実技は与えられることよりはむしろ学生自身がみずから汲みとる方式である。

種目としては柔道、剣道、弓術、端艇、水泳、野球、ラグビー、庭球、器械体操、徒手体操、陸上競技、馬術、ホッケー、山岳、サッカー、スケート、バスケットボール、スキー、空手、卓球、ヨット、バレーボール、ハンドボール、軟式庭球、ソフトボール、自転車、バドミントン、レスリング、フェンシング、重量挙、アメリカンフットボール、相撲、ボクシングの33種目に及ぶ。

## III. 大学体育における問題点

体育として基本体育と選択体育が具体的に正課として学生に与えられているが、はたして大学の教育課程で教育基本法、学校教育法でいう文化の創造、教授並びに研究の点で妥当であるかどうかを検討するために次のような問題点を設定する。

### 1) 現代学生スポーツ人口の二重構造

戦後大学における学生人口構造の変化は著しいものがある。その機構上からしても、6・3・3

制の後に続く4年制新制大学、そして学生数の増加、社会的歴史的影響による思想的変遷等おそらく大学が発足して以来の変容であろう。しかしこれらを、ここで全面的に解析することはいささか問題点を逸脱するから、我々が当面関係しているスポーツの面からの分析を試みよう。

全学生数に対する体育会部員数の比は昭和34年以降著しく低下し(表1)、全学生数は同年以降著しく増加し、その中にはあらゆる種類のスポーツクラブが発生している。即ち大衆スポーツとして多くの一般学生に親しまれる存在となった。しかるに体育会は伝統ある運動部として学内における不滅の存在ではあるが、全学生に対する比率は極めて低くなった。

学生を一般学生(いわゆるスポーツクラブに参加する学生を含む)と体育会学生に分け、その個々の性格を分析、比較すると、その間には次のような差異が発見出来る。

体育会部員は主として循環気質で一般学生より高い傾向を示していることで明朗性や社会性を認めることが出来るが、また神経質の傾向がかなりの部で目立っていることも注目すべきである。

この特質は体育会部員数の全学生数に対する比率を決定する有力な因子であると考えられるが、加うるに社会的影響は加速度的に増大するであろう。

歴史的には十九世紀の貴族階級のスポーツが今世紀に至り大都市を中心に活発なスポーツ活動はめざましく、特に日本における人間主体性への認識が深まり大衆スポーツの隆盛をみるようになった。この事実は大衆スポーツ

の主な要因ではあるが、このあり方は従来のスポーツのそれとは多少性格的に異なった分子をはらむはずである。しかしこの大衆スポーツが、現在は異質のものとして批評されているが、将来このもののあり方を異質なものとしてのみ考えることは出来ない。またそれが今日の量的増大に対して、その力を高く評価する人もある。

もともと数多くの大衆から少数分子の発見も可能であろうが、しかし社会の進歩という視点から現代スポーツのあり方をとらえる場合、そこに未来への開かれた展望をよみとるか、あるいはそこにスポーツの墮落を見出すかという現代のとらえ方の差異から生じているのである。<sup>(4)</sup>そして現代において歴史の動きを担っている大衆についての価値評価が大衆スポーツの方向を決定していることを知る事が出来る。<sup>(5)</sup>

表1 全学生数に対する体育会部員数の比率

年度 (昭和)	総数	体育会	比率
26	1,667	340	20.4
27	1,967	342	17.4
28	1,805	346	19.2
29	2,318	408	17.6
30	2,492	361	14.5
31	2,382	478	20.0
32	2,444	546	22.3
33	2,447	690	28.2
34	5,223	666	12.8
35	5,653	646	11.4
36	5,472	604	11.1
37	6,308	489	7.8
38	5,844	369	6.3
39	6,604	242	3.7
40	6,698	439	6.3
41	6,841	466	6.8

(体育研究所調査)

大衆スポーツの分析にあたって、いつも判断の基準として採用されているのは、純粋スポーツの立場である。純粋スポーツはその性格から文化の典型であるとして大衆スポーツにたいする悲観論もそしてまた楽観論も、その議論を展開しているのである。

他のもう一つの論点は、現代のスポーツを過去の継続、発展あるいは没落としてとらえるのではなく、現代の中に新しいスポーツが発展する萌芽を探ろうとする論点である。大衆スポーツが育生するほんとうの基盤は現代のなかに存在している。そして現代のこの二重構造を批評する前にこれをよく認識することが重要であろう。

## 2) 基本体育の価値

平均余命の延長とこれにともなう労働可能限界の拡張ならびに労働時間の短縮からくる労働密度の上昇は現代の歴史的、社会的の特徴ある変容である。しかるに、これを体力の見地からすれば、現代文明の技術的進展にともない生物的体力の変位は社会適応としては当然なことであり、またこの適応現象なくしては生活の可能性も失われるであろう。

この現実とは人類の歴史を考えると生活体である人間の姿をふりかえるならば、そこに一つの方向が暗示されている。人間本来の姿は自然を対象とした文化行為から出発したにもかかわらず大脳皮質に偏重した知的文化の形成に至った近代文明は文化すべき人間を盲目的に使役する様相を呈している。ここで生きるべき主体である身体の衰退を考えないわけにはゆかない。この現実とは、これに対する無意識的反動欲求の表現として基本的に保有する欲求の一つである跳走投の行動は大衆を知的文明の盲目的柵内に止めておくことは出来ないであろう。そこで欲求の発露としてまた人間本来の目的を求めるとして大衆スポーツが見られるのである。従って一般スポーツが基本的欲求を通して大衆の価値志向として表現されるに至ったのであろう。そして現実とは人間に基本的型態と活動能力が与えられるはずである。

更に大学における基本体育の価値を考えると新らしい文化への創造性につながるスポーツの一つの基盤並びに方法として、ここに基本体育の存在価値があるのである。一般にすべての行為は基本が不可欠の条件であるように、基本的身体活動が現在のスポーツをより高い水準に高める要因ともなっている。

## 3) 教材としてのスポーツ

ここでスポーツそのものについて改めて論ずる必要はあるまいが、現実にはスポーツが教材として採用されているからには、その理論を一応明らかにすべきである。

もともとスポーツは、好むが故になされる身体活動であり、動機は個人により異なるといえどもその行為の中には何ものもひそんでいない。従来スポーツの定義づけには数多くの表現を

みるが、実際スポーツを純粹にやるものにとって、それらは何か無関係というよりはむしろ異和感すら覚えるものである。

例えば心身の鍛練であると言い、ある者は社会性の獲得であると言う。実際スポーツをやるうにこれらのものを意識して行為することはまずあり得ない。あくまでも個人的好みによる行為であるが、たまたまそれが人間の文化行為と相似であるために教育との関連を生じるのである。

周知のように人間的主体の本質を自覚的表現的主体として、これを文化的主体と考える。

更に人間生命をみずから完全に実現しようと努めること、それが文化活動でありうる。教育はもとより主体に関して教育者の助力によって主体を形成することが人間を教育するということである。しかし文化は主体によって生みだされ主体によって形成される。そうすれば文化の根柢には教育があるといわなければならない。しかし教育もまたそれが一つの形成として文化であるのでなければならない。したがって文化はみずからのうちに、みずからの根柢を養う働きをもっているはずである。文化と教育とは常にこのような関係が成立する。

しからは文化行動の一つとしてスポーツを考えると、これが教育の場において教材として可能であろうか。教材は形成に対する材料としての単なる素材ではなく本来表現的自覚性を本性とする生命を教育的に高めあげるための客体的な媒介にほかならない。

ここで身体活動は一つの媒体として本質的な意味を持つものであり文化の主体の根柢から培う教育は身体に関してはその強化と技術の向上が具体的課題とならなければならない。そしてそこに適応、順化の過程があるのである。<sup>(8)</sup>

#### 4) 体育における身体的意義

かく考えてくると大学ではスポーツの教育的意義は、みずからのうちに根柢を養う意義が強調されるが、生理的身体に関する見解がないわけではない。もとよりここで人間の二元論を論ずるつもりはないが、現実に身体は主体と自然の間に存在するものであり、歴史的生命的主体は広義の環境という意味から身体的制約の下に身体を媒介としてのみ実現されることが出来る。この意味で身体の本質は歴史的、技術的として意味が生じる。したがってスポーツを教育の場に置くときは主体を根柢から培うことを課題とするため、身体に関しては適応、順化の過程を中心にして与えられなければならない理由があるわけである。<sup>(9)</sup>

人間の思想が身体を真実に身体として発見し身体をその真相において理解し始めたのは決して古いことではなく、むしろ最近のことである。身体は表現の原理なのである。そして身体的技術が成立するためには行為が必要である。行為は刺激に対する反応と考えられ、主体が環境から作用され、逆に主体は環境に作用する。いわゆる適応関係が認められる。そして主体と環

境とが対立し、その調和を媒介するものが技術である。この意味を更に普遍すれば知性は本来技術的である。したがって対象である身体活動を一つの反応行為とみなし、これが考察される場合、個の身体過程と集の自然過程を基礎的に立脚点とすることが出来る理由がここにあるわけである。

人間の行為は環境形成的であると共に自己形成的である。人間は環境から作られたものでありながら独立なものとして逆に環境を作ってゆく。このように形成的なものとして我々の行為は歴史的である。歴史的行為は技術的であり歴史的世界は技術的に作られてゆく。歴史的世界は創造的であり、人間は創造的世界の創造的要素である。創造的というのは独立なものが作られることである。技術は創造的なものとして単に手段とは考えられない。人間の行為は歴史的世界の自己形成にとって手段として働くことであり人間は単なる手段でなく自己目的でなければならぬ。このことは古くから身体の陶冶として考えられていた。

#### 5) 自治活動としての体育会

このように考えるとき慶應義塾にある現存の体育会活動というものは、その動機の如何を問わず、好むが故に行なわれる一つの文化行動とみなされるかぎり教育の一環としての課外教育として価値を認められ、ここに成立するのである。

そして更にスポーツの自治団体を考えるときに、身体活動が一つの媒介とし、伝統がおのずから人を教え環境がおのずから人を育てるという教育の自然的意味において、伝統や環境は自然的な教育であると同時にともに教育者であるはずである。そしてこの教育活動は古い伝統を負い未来に無限の創造を望みつつ現在の立場から人間の根柢を主体的に育成するところに意義があるのである。

このような現在へ人間を適応、順化させてゆくことは伝統のうち人間を育成するということと同時に真の現在は伝統と創造の矛盾を含むものである。この葛藤をみずからの主体に体験し、自覚と力量の涵養があり更に現在への適応を超えて未来への創造力を得るのであろう。そしてその行動が人の限界を越えたとき、つねに全人格の沈潜、専念の極致、そして一切のものの断念等は自己犠牲がもつ報酬としてみずから満足するのである。

結果的には一般に他から高く評価される場合もあろうが、また一切の断念により苛酷に批評を受ける場合もあろう。これらの結果は本人にとっては何ら期待するものではないが、社会との葛藤という点で批評される場合がある。一般に運動部が他から批評されるのはこれである。しかし小泉信三先生のいわれる不可能を可能にする理論もこの辺にひそむのであろう。そしてスポーツは直接個人の利害には関係なく自治の形式で存在することは、そこに考え方、感じ方、行動の仕方等を含む精神的なもの、それはむしろ個人的なものではなく社会的、歴史的な

ものとしての体験が反復され、更に現実の意識体験、現代意識と結合し創造性へと続く長い伝統を持った人間像として存在する。  
(10)

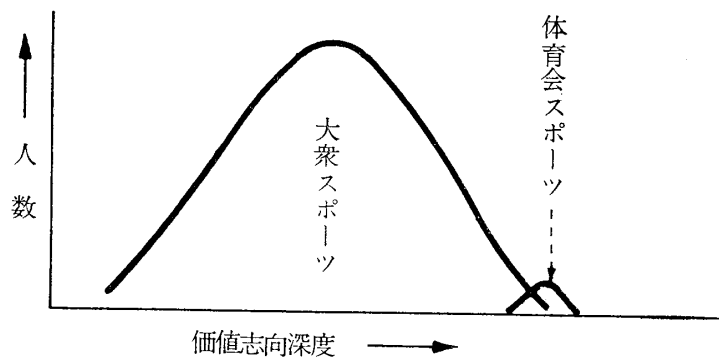
## 6) 選択体育の目標と現実

選択体育が体育会の先輩によって実施されている。その理論的過程はすでに述べたとおりであるが、スポーツが文化行動の一つとして考えられるかぎり教育の過程に入ることは妥当であり、体育会先輩は伝統の深き体験者であり現在の状勢のよき認識者であると同時に、それをこえてゆく創造的精神のよき理解者であり、学生は、この接触から汲みとることを期待するものである。慶應義塾体育研究所発足当時から選択種目として現在の方法で実施されてきたのであるが、その目標はこの短期間に学生に与えられるものは学生の自発性への動機であった。しかしこの現在の学生に対しての実施方法については多くの検討すべき点がある。

それは学生の大多数を占める大衆スポーツをいかに考えるかということである。

学生との接触による反応は学生の価値志向の深度により大衆スポーツとして或いは純粹スポーツとして反応するであろう。さらに個人の有する価値志向は環境と性格によってそれぞれ異なるはずである。(図1)

図 1



この大衆スポーツに対する批評はさまざまであるが、この場合は批評するよりも現代のスポーツを過去の文化の継続、発展あるいは没落としてではなく現代大衆スポーツの中に新しいスポーツが発展する中核を発見し更に発展させる努力が必要である。しかしその結果が必ずしも純粹スポーツと等しくはなくとも、現代の大衆スポーツを尊重し教育的愛をなげかけることが必要であろう。

しかしその前提として大衆を良く認識することが必要条件であると同時に極めて困難な問題として残るが、そのためには批評より以前にその環境を分析し更にその過去の歴史を知る事が現在を最も正確に認識する道である。更に純粹スポーツを体験したものにとって現在の大衆を深く認識し、これに動機を与えることは大衆に対して我々の価値志向の方向を転じる喜びがあ



るはずである。それは広義での後継者の育成でありそれが個人の継承につながるものとして新たにその視野の拡大を願うものである。しかし具体的にこれが完遂を考えると、そこに多くの矛盾を感じるものである。即ち長期にわたる体験と思考との集積から創造性へと発展するこの過程を、僅かの期間で与えられることが可能であるかという問題である。しかしこの場合は大衆に動機を与えることで、それ以後はどう発展するかは個人の性格によりそれぞれ異なってしかるべきである。我々に具体的に与えられた教育の範囲は動機となるべき環境を与えることであり、短期間にこの環境を作り出すためには長き伝統と深き創造性を止揚し得る人間像が必要である。もしかりにこの動機によってあるスポーツが成長したときにそれが異質なものとなるかもしれないが、それはなんら支障はないのである。新しく萌芽えた若い芽は強力な一つの主流として進展するのであろう。もしかりにこれを伝統のみにこだわった古い型と同一のものであったとしたならば、逆にそれは本来の意味での創造性ではないかもしれない。また我々は異質であることを恐れて焦躁したとしても、彼等の新しいエネルギーとしての力をまげることには不可能であろう。

それはあくまでもその時の環境により大衆の価値志向が異なるからであり、またその深度は性格によって決まるものである。

この場合の教育方法は教育者と被教育者の人間的交渉によるものに属し、それは教育者の態度に重点が置かれる形式である。そしてその態度に共感的交渉として被教育者の行為に動機をうみ出し、その適応性は新しい進展の道を開くであろう。そこに大学における自由性が存在する。  
(11)(12)

#### IV. 大学における体育の存在価値ならびに方法

大学教育の一般論をあげ、これに体育が該当するか否かを考察する。

もともと大学は単なる学校教育制度の列の中に配置されることの出来ない特殊の機能を持っているはずである。歴史的にも古く希臘にさかのぼるが彼らとその学問的精神を共有しているとしても、その精神に従って活動するために設けられた組織は類似点はあっても異なる点があり歴史的には関連が少ない場合もある。現在の大学にある学者の一致している意見は、研究と教授との結合において研究者だけが真の認識の過程と接触しているので、かかる人自身が生ける学問であり、これと交わることによって学問はそのあるがままに見られ、学生の中に同じ学問的衝動を呼び醒まし、みずから探究するものだけが生々と教えることが出来る。すなわち研究と教授との結合体が大学の根本観念であろう。しからばこの研究の根源、それは未知に対する知識欲があげられ、古くは学問に関して知識欲をもったものが集まり討論されたと伝えら  
(13)  
(14)

れている。これらの研究、教授と知識欲による人的結合の総体が大学の本質であろうが、近代の社会的要求と相まって学業内容の過剰は直接職業へと結びつき、場合によって研究のみを主体とする研究所の新設を望まれ、また専門課程と大学院に分かれ、そのためあらためて教養としての要素を意識してこれを別にとり上げなければならない運命となった。

研究者は研究のみに専心することを望み、職業的専門学科のみに専心することを望む教授も数多くなっている。また学生自身にしても膨大な授業内容と試験のために勉強し、すべてを試験によって判定されるようになり、大学も職業あるいは就職のための過渡的手段と化している。このような現状は学生にとって入学当時の人生への情熱はいつしか消えさり、単に職業に救いを求めて終わるであろう。

このような現実をながめるとき、ここで再び大学の本質を考えるならば基本的にもつ知識欲にもとづいた研究と教授は学生に人生を与える動機であり同時にこれが教養としての過程は無意識のうちに養われることの必要性を誰しも感じるであろう。そしてその与えられた動機は学問の膨大な内容も、職業に対する準備もすみやかにみずから消化しうる能力が与えられるはずであって、決して現実の大学内における組織に手を加えても大学としての目的を達するとは思えない。大学は学生あつての教授であり研究あつての教授であることを考えるとき、研究所の分立、あるいは教養課程と専門課程の分立もまた更に専門課程の高度化としての大学院設置等は本来の意味における大学としての価値は決して好転しないであろう。また学問内容の膨化を救うべくかりに学年を延長したとしても、それは教授自身の満足感はあるにしても学生には空虚なものとなる。しかし現在の日本における大衆教育を思うとき、具体的に学生数の増大と教授内容の膨化、更に加うるに経済的制約の条件等を処理しなければならない現況である。

このような困難な大学の運営の中で体育の存在価値を考えてみよう。体育の基本であるスポーツの身体活動は人間的主体の本質を自覚的表現的主体として考えるとき、これは文化的主体とみなされる。さらにそれは環境形成的であるとともに自己形成的であることから創造的世界の創造的要素であり単なる手段ではなく体験から創造へつながる自己目的であった。従って体育は知性に関する教育の存在と平行して大学における価値を認識しなければならない。そして研究と教授による人間的交渉は自己形成的である身体活動の場において動機を与えるに充分である。現在の大衆スポーツが知的偏重に対する基本的身体活動欲求であることを思うとき、これに動機を与えることは大学の本質を与えるうえに極めて有効な方法となる。さらに対象である身体活動を遺伝点から環境点に展開し適応、順化の過程を自然過程と身体過程の分野から分析する大系は学としての価値を与えられ、科学的認識を高次の立場から持たなければならない。この事実は大学の本質に近づく一つの方法である。

## V. 結 語

大学における教育基本法，学校教育法にうたわれている趣旨は抽象的であり極めて幅の広いものである。これが具体化に関して大学の本質を考え合わせるとき，そこに研究，教授の自由性があるはずである。従って現行の体育実施については検討すべき多くの問題が含まれているため次の問題点について検討し大学における体育のあり方について論じる。

1) 現代学生スポーツ人口の二重構造 一般学生のスポーツと体育会学生のスポーツを含むスポーツ人口の二重構造があり，両者は性格的にも異なり，また歴史的にも大衆スポーツの存在は大きく評価されつつある。これが育生する基盤は現代のなかにある。

2) 基本体育の価値 現代の労働条件の変容からくる労働密度の上昇，文明の技術の進展にとまなう生物的体力の変位は人間の基本的欲求としての大衆スポーツの発生をみるに至った。従ってこの基本的欲求である跳，走，投の基本体育に価値が生じてくる。さらに創造性へ続くスポーツの基盤としても重要である。

3) 教材としてのスポーツ 純粹スポーツを一つの文化行為とみなすとき結果的に教育との関連が生じるために教材として可能になる。それはみずからの根柢を養う働きをもっているから教材は形成に対する材料としての単なる素材ではなく本来表現的自覚性を本性とする生命を教育的に高めあげるための客体的な媒介となる。

4) 体育における身体的意義 身体活動は環境形成的であると共に自己形成的である。人間は環境から作られたものでありながら独立のものとして逆に環境を作ってゆく。このように形成的なものとしての身体活動は歴史的である。歴史的であるということは創造的であり，従って人間は創造的要素である。創造的というのは独立なものが作られることであり，身体活動は創造的なものとし単に手段とは考えられない。

5) 自治活動としての体育会 スポーツに関する自治団体は好むがゆえに行なわれ，そして直接個人の利害には関係なく自治の形成で存在し，そこに考え方，感じ方，行動の仕方等を含む精神的なもの，それはむしろ個人的なものではなく社会的，歴史的なものとしての体験が反復され更に現実の意識体験，現代意識と結合し創造性へと続く長い伝統を持った人間像として存在する。

6) 選択体育の目標と現実 選択体育は体育会の人間像と学生との接触により，この短期間に与えられるものは主として動機である。以後の発展的過程は学生の性格と価値志向によりそれぞれ異質なものとなる場合もあろうが，大衆スポーツとしての価値は存在するであろう。

ここで大学における体育の存在価値を考えると、大学は元来研究と教授の結合体であり真の認識の過程と相触れている研究者だけが生ける学問であり、これと交わることによって学生の中に同じスポーツ的衝動を呼び醒まし得るのである。しかるに現代の大学は教授内容の膨化と職業あるいは就職のための過渡的手段と化している。この時にスポーツ的身体活動は人間的主体の本質を自覚的表現的主体として考えるとき、これは文化的主体とみなされる。さらにそれは環境的形成的であるとともに自己形成的であることから創造的世界の創造的要素であり、単なる手段ではなく体験から創造につながる自己目的でなければならない。従って現代までの知性に関する教育の存在と平行して文化の一分野として体育の身体活動は大学における学としての価値を与えられるであろう。そして更に現代の大衆スポーツの存在価値を認識するとき、大学はこれが自発的育成について動機を与える場を持たなければならない。

また一方社会要求の点から平均余命の延長にともなう労働の延長および労働時間の短縮による労働密度の上昇等は健康および体力の増強を要求する。そのために保健体育は社会の労働関係業務に対する需要、保健管理、行政研究、教職そして大衆スポーツの場を持つものである。大学の本質は社会要求だけに答えるものではないが、現代の労働問題に適應する正当な人間像も必要不可欠の条件である。

- 注 (1) 湯浅徹平：新制大学における保健体育の教育について、慶應義塾大学“体育研究所紀要”第5巻第1号，p. 2, 昭和40年。
- (2) 中井忠男・秋山誠一郎：スポーツマンの適性について，慶應義塾大学“体育研究所紀要”本号。
- (3) 辰沼利彦：スポーツの精神的意義，教育と医学，第12巻第7号，p. 588, 慶應通信，昭和39年。
- (4) 藤竹暁：大衆文化，p. 227, 培風館，昭和38年。
- (5) 谷川雁：日本の二重構造，“亀裂の現代”p. 202, 春秋社，昭和36年。
- (6) 竹中正一郎：スポーツを通しての人間形成，慶應義塾大学“体育研究所紀要”第6巻第1号，p. 9, 昭和41年。
- (7) 木村素衛：文化の哲学と教育の哲学，p. 33, 岩波書店，昭和16年。
- (8) 辰沼広吉：保健体育の対象と方法に関する私見，慶應義塾大学“体育研究所紀要”第3巻第1号，p. 1, 昭和38年。
- (9) 三木清：技術哲学，p. 6, 岩波書店，昭和16年。
- (10) 務台理作：伝統，p. 1, 岩波書店，昭和16年。
- (11) Viktor E. Frankl: Der Unbedingte Mensch, p. 93, Franz Deuticke, Wien, 1949.
- (12) 細谷恒夫：人間の形成，p. 12, 岩波書店，昭和16年。
- (13) 石原謙：大学の歴史，p. 4, 岩波書店，昭和13年。
- (14) Karl Jaspers: Die Idee der Universität, 1946. (森昭訳，理想社，昭和30年)